

お知らせ（平成24度）

『第12回熊本県腎不全看護研究会報告』



平成25年2月24日に第12回熊本県腎不全看護研究会を開催いたしました。朝から寒かったのですが、たくさんの方にご参加頂きました。ありがとうございました。

前回と同じ『ソリューション・フォーカスト・アプローチ』というテーマで、患者役・看護師役で演習を行いました。初のグループワークで、世話人の不慣れな面をあったかと思いますが、皆様の活発な意見が飛び交い嬉しく思いました。

グループ討議後は、グループごとで行った討議内容の発表を行いました。患者役・看護師役でそれぞれが感じたこと、普段患者さんと接して自分の言動がどうだったかなど、意味深い意見を聞くことが出来ました。患者役になり感じた事などは、今後の看護に役立つ経験だったのではないかと思います。

当研究会での学びが、皆様の日々の業務に活かされます事を期待致します。来年度もたくさんのご参加をお待ちしております。

『第15回 日本腎不全看護学会学術集会』



日時:平成24年12月1日～2日

場所:愛媛県県民文化会館 ひめぎんホール

テーマ:支えあう腎不全看護チーム力～全国から地方へ、そして地方から全国へ～

愛媛で開催された、第15回日本腎不全看護学会学術集会・総会に世話人2名が参加しました。今回は「支えあう腎不全看護チーム力～全国から地方へ、そして地方から全国へ～」というテーマでした。透析医療は、透析患者の高齢化や長期透析患者の増加、様々な合併症対策や家族への協力が必要となる中、介護者の高齢化や通院問題、長期入院や介護施設への入所問題といった多方面からのアプローチが必要となってきています。シンポジウムでは、腎不全医療に携わる多くの職種がチーム医療の大切さについて考える機会として「腎不全スキルミクス」というタイトルで、それぞれの立場から討論する場が設けてありました。

また、特別講演の日本福祉大学の渡辺哲雄先生の「老いの風景～老いること、死ぬこと、愛すること～」では、笑いあり涙ありの講演で、看護師としてではなく一人の人間として、人生の終末について考えるとてもよい機会となりました。今回の学会では、モーニングセミナーやスウィーツセミナーといった新企画や愛媛ならではのポンジュースコーナーなどもあり、おもてなしの心に世話人2人もほっこりした学会参加となりました。

『第11回熊本県腎不全看護研究会報告』



平成24年9月30日に第11回腎不全看護研究会を開催しました。

運動会の時期と重なった為か、残念ながら通常の参加人数の半数にも満たない参加となりましたが、デモンストレーションなどもあり楽しく学ぶことができました。

デモンストレーションでは、普段の自分のコミュニケーションを見直す機会にもなったと思います。研究会開催後の懇親会も多くの方に参加頂き、講師に質問をする機会も設けることができ盛況でした。多数のご参加ありがとうございました。

次回の第12回腎不全看護研究会は、平成25年2月24日にグループワークを中心に開催を予定しております。事前申し込みが必要で参加人数に制限もありますが、たくさんの方の参加お待ちしております。

『私が考えるサイコネフロロジーの基本的考え方と臨床』



日 時:平成24年9月16日

場 所:鹿児島県 南日本新聞会館 4階みなみホール

第5回鹿児島県透析看護研究会に世話人2名が参加しました。

基調講演では、鹿児島大学の山田保俊先生から「転換期をむかえた腎移植～免疫抑制剤の進歩による恩恵～」というテーマで免疫抑制剤の進歩により入院期間も短くなったことや、臓器移植法の改定による親族間の提供などの話があり、腎移植は専門医療であるが先進医療ではなくなったこと、医療の潮流をキャッチアップしていくことの必要性を感じました。

特別講演では、松江青葉クリニックの春木繁一先生の「私が考えるサイコネフロロジーの基本的考え方と臨床」というテーマでの講演がありました。透析患者数の増加や高齢化に伴い、対応困難な患者も増えてきており、どう患者に向き合っていくかを考えるよい機会となりました。患者の「怒り」や「攻撃」の後ろにあるものを理解することや、患者の身の上になって考えることはもちろんですが、私たち医療従事者も自分の能力を超えてまで献身的に振る舞うと燃え尽きてしまうこともあるので、「できないことはできない」と伝える勇気を持つことも大事であることを学ぶこともでき、大変有意義な研究会でした。

『PD+HD 併用療法について』



日 時:平成24年7月21日

場 所:福岡県中小企業振興センター 2F 大ホール

九州内関係施設から医師約40名、コメディカルスタッフ約70名の参加で検討会が開催され、世話人2名参加した。

一般演題で6題が発表され、その中で、難治性腹水に対するPD導入で、末期の肝硬変、心不全症例に対し、家庭復帰が可能になった発表があり、これは通院透析が困難になった終末期透析患者にとっても同様であると感じた。

家庭で最期を迎えたい(入院はしたくない)という患者の、人生の終わりをどのように迎えるかという倫理的な問題によくぶつかるが、PD はひとつの選択肢になり得ると感じた。

また、特別講演では、『PD+HD 併用療法について』福島県立医科大 準教授 寺脇博之先生の講演があり、PD 単独でうまく管理が出来なくなった時、併用療法を選択することの有用性が述べられた。

HD を併用することによって、あっ、なんかいいかもしれない・・・と思われるもの・貧血の改善・体液過剰の改善・D/PCr の改善・中皮細胞の減少等々に加え、なによりも、毎日休みのなかった PD 生活に1日/1週間の holiday ができ精神的にも肉体的にも QOL の改善に繋がったということであった。

永続的ではない PD 療法ではあるが、少しでも良い状態で永く続けることに繋がる療法であると感じた。

『患者教育に生かすコーチング』



日 時:平成24年7月3日

場 所:福岡市立婦人会館

H24年7月3日、福岡市透析看護研究会 第一回研修会に参加しました。

講師の先生を招かれ、透析看護に活かすコーチングについての内容でした。

慢性の病気はセルフケアを要する病気で、急性の病気とは異なった援助が必要です。希望を持って病気と付き合えるように援助し、適切にセルフマネジメントできるようにすることが看護の目標であり、相手が望んでいる目標を自ら達成することができるように、自発的に行動することを促すよう働きかけることなど、コーチングについて学びました。

患者さんとの関わりを見直す機会ともなり、慢性期の看護について多くのことを学べる機会となりました。